

## 身近なエコについての Q&A



### Q1. 「エコ」ってそもそも何ですか？

「エコ」は、もともとは「生態学」の意味だった「エコロジー」を省略した言葉です。

1970年代以降環境問題が深刻化するなかで「環境保護思想・環境保護運動」という意味で使う人が増え、生態学と区別するために「エコロジズム」という言葉も生まれました。思想・運動としてのエコロジーは、企業や経済活動に対抗する要素を強くもっていましたが、1980年代後半以降、地球環境問題のブームの到来とともに反体制的要素を薄めた「エコ」の用語が広まりました。起源は定かではありませんが、1989年には環境配慮商品を認証する「エコマーク」が生まれ、企業やNPOの環境活動の見本市である「エコライフフェア」が1990年から開催されていることから、20年以上前から使われていたことは確かといえます。

現在は、「エコドライブ」「エコファンド」「エコクッキング」「エコプロダクツ」などさまざまな環境に配慮したサービスや商品、行動様式などの接頭語として「エコ」が広く使われるようになってきました。類義語として「グリーン」が使われることも多く、「グリーン購入」「グリーン電力」などの言葉も定着してきました。「エコツーリズム」と「グリーンツーリズム」のように省庁によって使い分けをしている例もありますが、明確に使い分けがなされているわけではなく、語感などで使われていることもあります。

「エコマーク」は一定の基準を満たした商品しかつけることができませんが、一般には「エコ」をつける基準は存在しません。

商品のなかには「エコ」や「グリーン」を売り物にしつつ、実際には環境破壊につながっているものもあります。このような商品は「green」と「whitewash（ごまかし）」を合成して「greenwash」と呼ばれています。

### Q2. 地球温暖化は本当に二酸化炭素のせいですか？

二酸化炭素を含む「温室効果ガス」が、地球規模の温暖化を引き起こしていることは、ほぼ確実と考えてよいといえます。

「気候変動に関する政府間パネル」（IPCC）が2001年に発表した第3次評価報告書は、我々を取り巻く気候システムの温暖化は決定的に明確であり、人類の活動が直接的に関与していると結論づけています。そして、人類による化石燃料の使用が地球温暖化の主因と考えられ、自然要因だけでは説明がつかないことを指摘しています。一部の科学者は異を唱えています。世界中の非常に数多くの科学者によるIPCCの研究結果は、広く社会に妥当なものとして認知されています。

18世紀の産業革命以降の石炭や石油など化石燃料の大量消費により、大気中の二酸化炭素の量は200年前と比べ実に約35%増加し、同じ期間の急激な地球的な気温の上昇と密接に関係しているとされています。

### Q3. 「マイ箸」を使うことは本当に環境に良いのですか？

環境問題への取り組みは、どの視点から見ると評価が異なってくる難しさがあります。「割り箸」の不使用運動もその一つです。大量の安価な割り箸の普及は、原材料の調達に中国などでの森林伐採の問題をはらんでいる一方、国産の間伐材を有効利用した割り箸は、日本の森林を豊かに生育させることに役立ち、雇用を生んでいる例もあります。ゴミ問題という立場からは、確かに割り箸は負荷が大きいといえますが、「マイ箸」は洗浄による水の使用と水質汚濁という視点からは、望ましくないといえます。

そうしたことを判断するための一つの基準として、製品に関する資源の採取から製造、使用、廃棄、輸送などすべての段階を通して環境影響を定量的、客観的に評価する手法として「ライフサイクルアセスメント」（LCA）が考えられ、総合的に環境負荷の少ない製品を選択する際の情報として普及しつつあります。

必ずしも、LCAが万能であるわけではありませんが、大切なことは、何か一つの情報を鵜呑みにしてしまうのではなく、多様な視点・指標があることを知り、それらを総合的に評価して行動を選択していくことです。

## 水や電気の節約は効果があるのですか？ Q4.

経済的な意味でも節約するに越したことはないのは確かといえます。使わない電化製品の主電源を切ったり、「マイバッグで」買い物をするなど、私たち一人ひとりが生活のなかで「エコ」活動への意識を高めることは大切です。風呂の残り湯全部を2日間洗濯や庭の水やりに使ったとすると、二酸化炭素の排出量を約500グラム減らし、約180円水道代を節約できます。

そして、私たちを取り巻く環境問題を解決していくためには、水や電気の節約だけでなく、さまざまな取り組みを積み重ねていくことが大切といえます。

そのためには、身近な活動をそのまま終わらせるのではなく、それをきっかけとして、地球の環境を守り、持続可能な社会をつくっていくために、どのように行動していけばよいか、関心をもっていくことが望まれます。

## Q5. 「エコ製品」をどのように評価すれば良いですか？

家電品をはじめとして、生活用品の購入に関して「エコ製品」が注目されていますが、環境は一つの指標だけで評価できるものではありません。例えば、二酸化炭素の排出対策だけでなく、生物多様性の問題はないか、といったように、多角的に評価していくことが大切です。

「エコ製品」に買い換えることは一見良いことですが、それは同時に古い製品を廃棄するために環境負荷をかけることになったり、新しい製品を製造することに伴って環境負荷をかけることになります。LCA (Q 3参照) のような、総合的に評価する視点を参考にすることが望ましいといえます。

また、「エコマーク」に代表されるような認証制度もあり、私たちが製品を購入する際の一つの目安となっています。最近では、「カーボンフットプリント」と呼ばれ、消費者への「見える化」として、製品の製造の際にどの程度の二酸化炭素を排出しているかを表示していく動きもあり、こうした情報を生活のなかに取り入れていくことも、「エコ」の実践に役立ちます。

## 最近良く耳にする用語

環境問題を考えるにあたって、良く聞かれる用語の一例をご紹介します。関連するサイト等を通じてさらに詳しく調べてみてください。

### ● LCA (ライフサイクルアセスメント)

これまでの環境負荷評価は、製品の使用や廃棄の際に有害物質が出るか否か、また、処理が容易であるかなど、一定のプロセスだけを評価したものが多かったが、それだけでは全体として見ると環境への負荷が低減されない製品が生産されてしまう可能性がある。

そこで製品の原料採取、製造、流通の段階も含めて環境への負荷を評価することにより、経済社会活動そのものを環境への負荷の少ないものに変革しようと考えられた手法がLCAである。

日本LCA学会

<http://ilcaj.sntt.or.jp/>

### ● カーボンフットプリント

「炭素の足跡」(Carbon footprint)を意味する言葉。消費者が購入しているすべての製品やサービスの原料採取、製造、流通などの各過程で排出された「温室効果ガス」の量を合算し、得られた全体の量を二酸化炭素量に換算して「見える化」する取り組み。

Carbon Footprint of Products

<http://www.cfp-japan.jp/>

### ● エコマーク

さまざまな製品やサービスのなかで、「生産」から「廃棄」にわたるライフサイクル全体を通して、環境への負荷が少ないと認められた商品につけられる認証ラベルのこと。このマークを抛り所として、消費者が環境を意識した商品選択を行ったり、企業が環境改善の努力を進めていくことにより、持続可能な社会の形成を図っていくことを目的としている。

財団法人 日本環境協会エコマーク事務局

<http://www.ecomark.jp/>

### ● 「COP10(生物多様性条約第10回締約国会議)」

1994年にバハマ・ナッソーにて第1回会議が開かれて以来、生物多様性条約の締約国が概ね2年ごとに集まり、各種の国際的な枠組みを策定する場がもたれている。

2010年は、国連の定めた「国際生物多様性年」であり、生物多様性条約締約国による第10回目の会議(COP10)が愛知県名古屋市で開催される。この年は、2002年のCOP6(オランダ・ハーグ)で採択された「締約国は現在の生物多様性の損失速度を2010年までに顕著に減少させる」という「2010年目標」の最終年に当たる。

生物多様性条約第10回締約国会議支援実行委員会公式ウェブサイト

<http://www.cop10.jp/aichi-nagoya/>

### ● ESD 「持続可能な開発のための教育」(Education for Sustainable Development)の略称。

社会の課題と身近な暮らしを結びつけ、新たな価値観や行動を生み出すことをめざす学習や活動を言う。環境省では、環境教育を発展させ、経済・社会の観点を盛り込み、学習者一人ひとりが持続可能な社会づくりに参画する力を育むことを促すことで、ESDを推進することをめざしている。

NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)

<http://www.esd-j.org/j/esd/esd.php>

## 「身近なエコ」へのガイドと提言

### 提言 生活者の立場でエコを考え、意志をもって行動する

地球環境パートナーシッププラザ (GEIC) [東京都渋谷区]

<http://www.geic.or.jp/geic/>



地球環境パートナーシッププラザ (GEIC) で毎年行われる「環境ボランティア見本市」

産業の近代化がもたらした大量生産・大量消費は、気候変動や生物の多様性への弊害をもたらし、地球規模での対策が急がれています。

私たち一人ひとりが身近な生活のなかで取り組めるエコ活動についても、国や行政、民間団体などから、さまざまな提案がなされており、環境への関心はますます高まっています。そうしたなかでは、人と自然とが上手に折り合いをつけていた時代の暮らし方を振り返ってみることも重要なことだと思います。

#### ■ まずは、ちょっとしたことから

自給自足、電気も使わないといった昔の生活に戻らなければならないというわけではありません。「エコは不自由で大変だ」、「環境は特別な人のやること」という誤解をもつ人は、そうした極端な取り組みだけを想像しているのではないのでしょうか。現在の私たちの暮らしのなかで、ちょっとしたことで見直せることはたくさんあると思います。できるだけ環境負荷が少ない商品を選んで購入することも、その一つです。私たち消費者の価値観が変われば、供給する側の企業の姿勢も変わります。そういう意味では、物を買うことも、意思をもったエコ活動といえます。たくさんの物があることに豊かさを感じ、安い、速い、便利だけを基準で購入することから、品質の良いものを選んで長く使うことに豊かさを感じるという発想の転換が必要です。食べ物一つとっても、「それが一体どこでどのように生産されて、運ばれてきているものなのか」ということに思いを馳せ、そこに価値を見出すことが大切です。

#### ■ 成果が見えにくいからこそ楽しみながら

また、環境活動は、すぐに成果や影響が見えないことが少なくありません。成果が見えにくいことを長く続けていくには、自分の興味のあることから無理なく、楽しみながら始めることをおすすめします。「自分の好きなものを守りたい」、「仲間と一緒に取り組んで楽しい」ということも大事な要素です。登山を趣味とする人であれば、山登りをしながら清掃をする活動に参加してみたり、地域の公園や緑地の手入れに参加し、終了後にお茶を飲んで楽しむといったように、取り組み方も楽しみ方も人それぞれです。

また、環境の問題はさまざまな分野と関連しています。耕作放棄された棚田の田植えや草刈りをして田んぼの生き物を守る活動は、限界集落の問題と密接に関係しています。都会のなかで無農薬の野菜を育てて緑を増やしたり、ヒートアイランド対策になる活動は、地域交流の拠点となる「コミュニティー・ファーム」としても活用されますし、園芸療法、高齢者の生きがいづくりとして活動にかかわってくる人もいます。こうした、環境を目的としていない別の活動と、連携・協働できる取り組みも少なくありません。そういう意味では、「環境」「福祉」「まちづくり」と線を引きする必要はないと思います。

取材協力

地球環境パートナーシッププラザ (GEIC)  
すどう みちこ  
須藤 美智子 さん



### エコ活動への「はじめの一步」

「エコ」をテーマとしたボランティア活動に参加したいと思っても、何からはじめてよいか分からない場合もあるかと思います。

まずは、どのような活動があるか、どのような窓口があるかを調べてみるのが第一歩になります。

#### 調べる方法の例

● ボランティア・市民活動センター等に相談する

● ボランティア・グループ内で、資料を集めたり、講師を呼んで「エコ活動」に関する勉強会を行う

### 身近なエコ活動の例

ボランティア・グループや学校、企業などのボランティア活動で取り組める身近なエコ活動の例をご紹介します。

#### ● ボランティア・市民活動のなかでエコに配慮する

活動時のゴミの削減や環境にやさしい製品の使用（国産間伐材製割箸など）、省エネ、イベント等終了後の清掃活動、移動時なるべく公共交通機関を利用するなど、日ごろの活動のなかで工夫できることがあります。最近では、食品でつくった「食べられる食器」もあり、ゴミが出ず、洗浄も必要ないとのことで、イベント等で利用され始めています。

#### ● 生活のなかで環境を守る活動

たとえ遠くへ出かけなくても、「環境に配慮した製品やサービスを選ぶ」、「環境に配慮した企業を応援する」、「持続可能な貿易（フェアトレード）に参加する」、「本当に必要な物だけを必要な分だけ買う」など、日常生活のなかでできるエコ活動はたくさんあります。

また、近隣の地域での清掃活動や地域を探索して貴重な景観、自然を記録する「エコマップづくり」なども、生活のなかで環境を守る活動の一例です。

#### 関連サイト

グリーン購入ネットワーク

<http://www.gpn.jp/>

家電製品協会 環境アセスメントホームページ

<http://www.aeha.or.jp/assessment/>

#### ● 森林や水辺を守る活動

渇水や洪水の緩和、水源の涵養機能、二酸化炭素の吸収による地球温暖化の防止など、多様な役割のある森林を守るための活動に、全国各地での林業体験を通じて森の未来を考える「ワークキャンプ」や「エコツアー」、農山村の方々との交流を通じて、森や山のこと、環境のことを学ぶ「森林ボランティア入門講座」などがあり、暮らしや生命そのものに欠かせない水の循環を保護する活動には、かつては豊かだった「サンゴ礁の調査」や、「干潟・浅海域の再生」、「川の浄化・改善」などがあります。

## ● 環境問題に関するセミナーやイベントに参加する

### ● 環境について取り組んでいる団体に直接相談する

## ● インターネットや図書館や書店にある雑誌や本から情報を得る

### 関連サイト

地球環境パートナーシッププラザ

<http://www.geic.or.jp/geic/>

環境goo <http://eco.goo.ne.jp/>

生物多様性条約第10回締約国会議支援実行委員会

<http://cop10.jp/aichi-nagoya/>

環境省 <http://www.env.go.jp/>

EIC ネット環境情報案内 <http://www.eic.or.jp/>

## ● リサイクル等の収集活動

一般的には、環境負荷やコストを考えると、Reduce（ごみになるものを減らす）、Reuse（再使用）、Recycle（再生利用）の順に望ましいといわれています。リサイクル活動も身近にできるエコ活動の一つです。家庭の天ぷら油の廃食油を集めてディーゼル車のエネルギーにし、公共バスを走らせるなどの活動もあります。

ただし、取り組む際には、きちんと情報収集をすることが重要といえます。リサイクルされる場所が遠隔の場合、輸送時のCO<sub>2</sub>排出が多くなって、そちらで環境に負荷を与えてしまう場合もあります。

また、極端な例ですが、具体的にどのような効果があるか分からずに収集のみ専念したり、誰も募集していないのに勝手に収集して送りつけてしまったり、収集を重視するあまり、無駄に物を使ってしまうのでは、折角の努力が生かされないどころか逆効果になる恐れがあるといえます。

関連サイト TOKYO 油田2017 <http://tokyoyuden.jp/>

## ● エコに関連するモノづくり

家庭から出る廃油は、水質汚染の一因となっています。その廃油を再利用した石鹸づくりやキャンドルづくりなどは、グループで楽しみながら環境問題について考えることができる活動といえます。

さらに、「海のごみから、アート作品を作る」という活動もあります。者にたどりつくごみを拾いながら、貝殻・流木・海藻や、長い年月を経て角が落ちた色とりどりのガラスなどを持ち帰り、アート作品として生まれ変わらせます。

## ● 「食」と「農」に関する活動

日本の食料自給率の向上が課題とされるなか、「食」と「農」に関する活動には、米をつくるとともに豊かな生態系の維持や心安らぐ風景の維持につながる「棚田の保全」や「休耕地の再生」、農業や化学肥料を使用しない「有機野菜づくり」などがあります。

食の安全について、関心の高まる昨今ですが、都会から日本の農業のあり方を考える「セミナー」や「ワークショップ」に参加することも、エコ活動の一つの入口です。

また、エビ、バナナ、チョコレートや揚げ物の油をつくっている人たちの暮らしや生産現場で、起こっている環境破壊を知ることも大切です。私たちの生活が、どんなに多くの人や環境に負担をかけているかを知るとともに、フェアトレードや国際協力の団体の活動に参加したり、寄付をしたりしてはみてはいかがでしょうか。

## 提言

## 多角的に考えてほしい「エコ」

特定非営利活動法人 JUON(樹恩)NETWORK

【東京都杉並区】

<http://juon.univcoop.or.jp/>

エコ活動への評価は、どの視点から見るかで変わる難しさがあります。私たちJUON(樹恩)NETWORKでは、国産の間伐材(森林の手入れの際、密に植えられた木を間引き、森林の中に光が差し込むようにするための作業をした際に生じる材)を有効利用した国産の「樹恩割り箸」の普及をめざしています。

私たちがこの活動に取り組んでいるのにはいくつかの理由があります。まず、日本で年間に使用される割り箸は250億膳あるといわれますが、そのほとんどが中国から輸入されています。中国では間伐材ではなく、普通の木を丸ごと割り箸に加工していますので、CO<sub>2</sub>を吸収する森林をそれだけ減らし、また遠くから輸送する際に多くのCO<sub>2</sub>を排出していることとなります。

### ■ 過疎地の林業振興にも

また、日本には多くの人工林がありますが、これらを維持するためには、間伐などの作業が必要です。作業をする人がその地域で生活していくためには産業が必要です。そのため、私たちは、「樹恩割り箸」を製造・販売することで、過疎地域の林業振興に貢献しています。「樹恩割り箸」の生産量は年間で約1,000万膳ありますが、これらは各地の知的障害者施設でつくられています。

さらに、「樹恩割り箸」は、大学生協で多く使用されていますが、大学生協では、排水の水質基準を守るために、洗浄が必要な普通の箸よりも、割り箸の方が望ましいという状況がありました。



知的障害者施設での製品出荷前の選別作業

### ■ 総合的に評価した結果の「割り箸」

確かに「割り箸」には、廃棄するゴミが出るというデメリットがありますが、私たちは上記のような状況を総合的に判断してメリットが大きいと考え、国産間伐材割り箸の普及に取り組んでいます。

身近なエコ活動に取り組む際にも、一つの視点からでのみ評価するのではなく、さまざまな角度から、環境にどのような影響があるかを知ったうえで行動する必要があるといえます。

そのためには、活動に取り組む際に、勉強会をしてみるとか、環境団体が開催する講座やイベントに参加するなどして、情報を収集し、どのような活動が望ましいかを考えてみるのが大切です。

こうした活動を推進していくうえで、各地のボランティア・市民活動を支援する拠点が、正確な情報の収集・発信、活動推進者へのアドバイスなどを担っていくことを期待しています。

### 取材協力

特定非営利活動法人  
JUON(樹恩)NETWORK

事務局長

かすみ たかゆき  
鹿住 貴之 さん

